

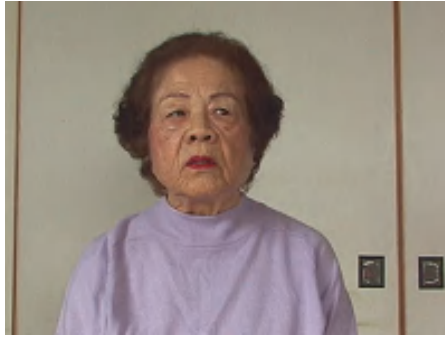
呉屋品子さん

沖縄戦時17歳

民間人

所属 沖縄新報

戦地 首里



尋常高等科を卒業して、紡績工場に就職。贅沢品だと工場が閉鎖になり、紹介されて沖縄新報社に就職した。東町に1年ぐらい、そうしたら戦争(沖縄戦)になった。私たちの年齢では(ある時期から)疎開は出来なかった。地元で働きなさいということで、ここにいるしかない。ずっと前に疎開した人は助かったけど。でも、私の年齢の人は軍属に採られているけれど、私が行かなかったのは新聞社が軍に協力していたからではないかと思う。

●1944(昭和19)年10月 十・十空襲

丁度出勤する時で泊市場の辺りで、敵とは思わないで演習かなと。新聞社は、空襲を察知したのかすでに東町から十貫瀬(じっかんじ)に仮事務所を作って移っていたのであまり被害も出なかったけど、多分輪転機なんかは駄目になったんじゃないかな。工場は駄目になった。

十貫瀬は住民は少なく畑がいっぱいあって、朝鮮の軍属が荷役で働かされて、死んじゃったらお墓で釜石被せて石油かけて燃した。あれなんだろうと見た覚えがある。よその人の墓だよ。

●1945(昭和20)年4月初めごろ 沖縄新報は首里の壕に移る

首里城の下に師範学校の壕があった。会社の壕は作ってなかったので、そこを借りて2ヶ月ぐらいおりました。新聞を刷る大きな紙をおじさんたちがトラックもないから荷車に積んで、わっしょいわっしょいして首里まで押して。

私の父母は浦添にいて一度は帰って来たが、首里に戻って。怖さを知らなかったのか、鉄兜を被って腕章をして、陸軍がスパイかと疑うので腕章をして、腕章には沖縄新報と書いてあった。

会社の人も皆同じ、地べたに板を敷いて寝るような感じ。壕は4つ入口があって、偉い人の部屋、記者の部屋があって、私たちは人の通る道に寝ていた。顔の上を飛び越え飛び越えて、暮らしていた。うちらは飯炊きみたいなもの、玄米をつついて。人がいないので、野菜や薪は盗ってくるような感じ。

新聞はガリ版刷りで発行していた。ガリ版の新聞は「現地軍発表、〇〇〇」という感じで。だから軍の発表のとおりですよ。龍潭池(りゅうたんいけ)の側に司令部があったのを、当時は私は分かっていなかった。記者の人は司令部に行って、現地軍発表と、あれを信じるしかない。行ってきて、ふうふうはあはあしてたもん。私なんか近くにあっても何でも秘密でしょ、ここが司令部なんて知られてない。

記事が集まった時だけ出していたと思う。毎日載せる記事はなかったんじゃないかな。A3ぐらい、1枚。新聞社が移動する時、壕の中に活字を持って来ているでしょ。学校の戸板は区切りがあるので、そこに活字の箱を載せている。昔の新聞はおじさんたちが1字1字全部手で取っている。判子があって、そこに仮名も漢字も埋めている。見出しもそれを書く専門がいる。爆風が壕の入口から入って来て、ぱんとやられて、立ててあるの(活字を載せた戸板)が倒れて。あれから新聞は出来ないのさ。

上の人誰も言わないけど、ろうそくやらマッチやら大豆、こんな配給を会社にくれてみたい。

新聞は住民がいるところに、誰それとなしに配っていた。情報を見せるために。(軍が知らせたいと思った情報を住民に知らせるために?)うん、金を取るんじゃないし。(それで軍から配給を貰ってたんですかね?)そういう約束だったんじゃないかな、私多分そう思います。だって他は何もないのに、マッチ、ろうそくなんで。

内地から来た新聞記者もいた。朝日新聞とか。碑がありますよ。ああいう人たちは仕事をしに来てるから。家族と早く疎開した人もいるし、途中で船でやられた人も。沖縄戦が始まる時に10人ぐらいはいたかねえ、お偉方も疎開している人はいるでしょ。家族は疎開させて1人残っている人もいるし。疎開している記者の人は、元の社には戻って来ていない。(※最後まで壕にいた記者たちによって、戦後、沖縄タイムスが創刊された)。

●1945(昭和20)年5月25日すぎ 首里城を離れ南に向う

首里の石嶺まで米軍が上陸しているので、グループを作って南部に下がりなさいと。家族はどこにいるか分からない。5~6名救急袋ぐらいを持って、食べ物は持っていない、慌てふためいて南部に向った。

(取材日:2013年2月3日)